

神青協





◆目次

目次・神宮の諸行事	一
新春挨拶（各単位会）	二
「神道講話を学ぶ」ウェブ研修会	三
竹島の碑現状視察・清掃奉仕並びに竹島研修会	四
北方領土の碑現状視察並びに清掃奉仕	五
硫黄島訪島事業	六
青年神職と歩く「伊勢の神宮」	七
令和四年度夏期セミナー	九
神職のための神宮研修会	十一
沖縄本土復帰五十周年記念事業沖縄戦全戦歿者慰霊祭／遺骨収集	十二
臨時総会	十六
顧問会	十七
古殿地清掃奉仕	十八
各地区報告（周年、研修会）	十九
神社おもてなし心得動画紹介／祈願碑動画制作	二十
神青協広報活動の移り変わり	二十三
中央研修会の案内	二十四
協賛広告／編集後記	二十五
日本文化興隆財団事業品のご案内	二十七



～祭の力で日本の復興を～

◆神宮の諸行事

一月 一日	歳旦祭
一月 三日	元始祭
一月 七日	昭和天皇祭遙拝
一月 十日	大麻暦奉製始祭
一月 十一日	一月十一日御饌
一月 二十六日	田乃家神社本殿御還座 ※皇大神宮摂社
一月 三十一日	大祓
二月 十一日	建国記念祭
二月 十七日	祈年祭（二十三日） 天長祭
二月 二十三日	大津神社仮殿御還座 ※豊受大神宮末社
三月 三日	神宮大麻暦頒布終了祭 川原神社仮殿御還座
三月 五日	※皇大神宮摂社
三月 九日	春季皇霊祭遙拝・御園祭 神武天皇祭遙拝
三月 二十一日	大祓
四月 三日	大津神社本殿御還座 ※豊受大神宮末社
四月 三十日	風日祈祭・神御衣祭 川原神社本殿御還座
五月 十日	※皇大神宮摂社
五月 十四日	大祓
五月 十七日	御酒殿祭
五月 三十一日	月次祭（二十五日） 大祓
六月 一日	
六月 十五日	
六月 三十日	

「神道講話を学ぶ」ウェブ研修会

令和四年七月四日、並びに六日の二日間に分かれて、「神道講話を学ぶ」ウェブ研修会が、それぞれ「理論編」「実践編」として、千葉県長南町に鎮座する熊野神社の宮司であられる宮田修氏を迎えて開催され、両日共に百三十名を超える受講者が集まった。

講師の宮田氏は、昭和四十五年に埼玉大学を卒業後、NHKにアナウンサーとして入局され、主にニュースアナウンサーをお務めになられた。平成七年一月十七日の早朝に起こった阪神淡路大震災の第一報をテレビを通して伝へ続けられた。

初日の冒頭、自身が何故「革新的」な報道の世界から真逆の「保守的」な世界である神社界へと転身し、神職となったのかをお話いただいた。

自身の経緯を冗談も交へながらお話される中で、神職となり、多くの先輩神職と交流することになったから、「先輩方がよく『自分は話すのは苦手です』と仰る事に、強い違和感を覚えた」といふエピソードを挙げられた。

神職は宗教家であり、話して相手を救ふのが仕事である。従って、話すのが当たり前の仕事であるならば、間違っても「自分は話すのが苦手です」とは言うてはいけなし、上手く話せるやうになる努力を常に続けなければならないと厳しいお言葉を頂戴した。私自身もさうだったが、これまでさういった考へには至らず、目から鱗の

思ひがしたのと同時に、大変に耳の痛かった会員も少なからず居たのではないかと思ふ。

我々神職は「言霊」の思想の下、「思へば伝はる」といふ考へに促われてゐると、その時初めて気付かされた。日本は島国であり、また米作りを中心として生活してきた関係で、古来より生き残るために、皆が同じ考へ方をするのが美德とされ、またそれが当然と考へてきた。

確かに同じ考へ方をする人たち同士であれば、わざわざ話さなくてもお互ひ合ふ事はできるかもしれないが、科学技術の発達と共に、我が国とは根本的に異なる歴史・文化、そして考へ方をする諸外国との距離が急速に近づき、これまでと同様ではいられなくなってきた。

これまでの常識や価値観が現在進行形で大きく変化はつていつてゐる昨今、我々神職が果たすべき務めについても、「戦争を境に日本人が捨ててしまった、先人たちが培ってきた素晴らしい考へを取り戻す社会的・歴史的使命がある」と、宮田氏は強い口調でお話になられ、だからこそ、「今何をすべきか、どうしたら伝はるか」を考へなければならぬと締め括られた。

続く「実践編」である二日目には、宮田氏から「私から直接アドバイスをするので、この場で話してみたいといふ受講者は是非話してみたい」との提案が有り、希望者を募り、実際に宮田氏と受講者へ向けて

講話をしてもらい、その場でアドバイスを頂戴するといふ時間が設けられた。

短い時間の中ではあったが、その中で「大事な事は繰り返して何度か言ふ」また「聞き手が理解できない言葉を使ふとその時点で聞き手の耳に蓋がされてしまふ」等のご自身の経験に基づく細かなアドバイスを頂戴することができた。その上で、上手な話し手が居ればその人の話をメモに書き留める等の「話の引き出し」をたくさん作る為の日頃の準備がいかに大切か、また自身の知ってゐる事を全て話したいと我々は思ひがちだが、時には潔く、話すテーマを絞ってしまふ方が相手に印象深く残る事もあるといった正に実践的なお話も頂戴した。

我々青年神職に課せられた使命の一つは、先述した通り「先人たちが培ってきた素晴らしい考へを取り戻し、次代に伝える事」である。

「日本人」としての遺伝子を持つ我々は、その遺伝子に対して忠実に生きる事しかできない。従って、新しい価値観や考へ方だ

けに拠つた生き方をする事はできない。

「鬱」や「引き籠り」が社会問題になって久しいが、それこそが「日本人」としての遺伝子と現在の生き方が噛み合はず、所謂「適応障害」に陥つてゐる証左であらうと思ふ。

当たり前の話だが、外国と日本は明らかに違ふ。互ひの違いを認め合ひながら共に生きていくためには、まづは我々自身の「出自」を知る必要がある。それを発信する事ができるのは今や我々「神職」しか居ない。現在の我が国で神職が果たすべき責任は非常に重いと、宮田氏は第二講の最後をさう言つて締め括られた。

「どのやうにしたら伝はるか」を学び、考へ、そして発信し続ける。その意義を再確認することができた、大変有意義な研修会であつたと思ふ。

研修会後の質疑応答も活発に行はれ、大盛況のうちに本研修会は閉会した。

(事業委員長 白石 憲一)



竹島之碑現状視察・ 清掃奉仕並びに竹島研修会

令和四年七月十三・十四日、島根県隠岐郡隠岐の島町に於いて、湯浅迪彦副会長をはじめ役員十九名参加のもと竹島之碑現状視察・清掃奉仕並びに竹島研修会を行った。

この「竹島之碑」は、かつて竹島近海における漁業の拠点であった久見の港を眼下に収める高台を選び、平成二十六年南坊城会長期の神青協創立六十五周年の節目に、不法占拠によって尊い命を奪はれた方々の慰霊をするともに、日本海が幾久しく穏やかな海であって欲しいとの思ひを込めて、地元隠岐の島町に住まふ人々をはじめ、多



くの日本国民とともに祈り捧げる場所としていと祈念し建立した。

十三日には、水若酢神社禰宜忌部正英氏を講師にお招きし竹島研修会を開催した。竹島について詳しくお聞きし、竹島の現状を正しく理解する事で、不法に占領されてゐる竹島の早期復帰へ向けた意識を参加した役員一同高める事ができた。

十四日は、生憎の天候により一部日程を変更し、先づ隠岐自然館を見学した。事前に職員の方に依頼し、映像等を使用しながら隠岐の島について詳しく説明いただいた。その後、水若酢神社に於いて正式参拝をし、宮司忌部正孝様より、我々の先輩方の活動に触れながら竹島についてご説明いただいた。

次に、忌部禰宜様にもご同行いただき久見竹島歴史館を拝観。久見竹島歴史館は、住民の証言や資料の収集を目的とした資料収集施設である。高齢化が進み、このままでは竹島問題の記憶が風化してしまふことを危惧し証言を後世に引き継いでいきたいとの思ひから地元の方々より熱心にご説明いただいた。資料もたくさんあり、竹島周辺は本当に豊かな漁業資源を抱く恵みの海であり、本土から海を隔てた離島の漁村にとっては父祖より大切に受け継がれてきた生命を支える漁場であった事が伺へた。

雨も上がり、いよいよ「竹島之碑」へと

向かった。前日から準備いただいた島根県神道青年会の皆様の多大なご協力のお陰により、石碑もその周辺も非常に綺麗な状態であった。雨あがりではあったが役員一同時間の許す限り一所懸命に清掃奉仕を行った。清掃後、大島居副会長の先導のもと拝礼し、早期の領土問題の解決を祈願した。「竹島之碑」の裏面には「敬神生活の綱領」の一節「大御心をいただきてむつび和らぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること」に基づく碑文が記されてゐる。

現地で感じた空気や得た知識をしっかりと伝え、どの土地にいても他人事ではなく自分事と捉へ各領土問題に向き合っていかなければならない。

(渉外委員 西田 周司)



北方領土の碑現状視察並びに清掃奉仕

令和四年八月四日、北海道根室市の納沙布金刀比羅神社境内に建立されてゐる「北方領土の碑」に於いて、現状視察並びに清掃奉仕を行ひ、役員十一人が参加した。

戦後未解決であつた領土問題の内、奄美群島、小笠原諸島、そして沖縄が祖国に復帰したが、北方領土すなはち歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島の北方四島は不法占拠され、未だ返還されてゐない。

終戦当時、四島全体に三一二四世帯、

一七二九一人の島民が住んでゐましたが、すべての日本人が強制退去させられてゐる。今現在も領土問題が未解決のため、生まれ故郷に帰ることもできない。北方領土は、私たちの祖先が心血を注いで開拓した日本固有の領土である。

当会では、昭和四十六年に北海道神宮で行はれた北方国土復帰祈願祭を皮切りに、昭和五十三年には神青協創立三十周年記念事業として早期復帰を願ひ、北方領土の見える納沙布金刀比羅神社境内に全国の会員が持ち寄つた石を礎石として「北方領土の碑」を建立した。以降、創立四十周年には北方領土の碑修復奉告祭、また創立五十周年には北方領土復帰祈願祭を執り行ひ、そして、平成三十年の創立七十周年には北方領土早期復帰祈願祭を齎行してゐる。

四日の当日は北海道神道青年協議会の協力のもと、午前九時に根室市・金刀比羅神社に於いて正式参拝を行った後、碑が立つ納沙布岬へ移動し、午前十時から現状視察を行った。碑の表面には「返せ 北方領土」、裏面には「一都一府二府四十三県の心をこめてここに記す」の文言が刻まれてゐる。

その後、北方領土を望む「望郷の岬公園」内にある資料館「北方館」を見学した。

我が国固有の領土である北方四島の早期返還と領土問題の一刻も早い解決を願ひ、祈りを捧げるとともに、今後の活動に対する契機とし引き続き課題に取り組んでいく所存だ。

領土問題の解決には、世代を超えて国民一人ひとりがこの問題を正しく理解し関心を高め、国民挙げての力強い世論の支持が必要であり、その世論の盛り上がりの中で、外交交渉を推進することが北方領土返還実現に繋がると信じてゐる。

(渉外委員 日比野 悌明)



硫黄島訪島事業

令和四年八月九日、硫黄島にて慰霊祭を行ふと共に、戦跡や遺骨収集の現場を見学した。前日に集合して研修が行はれ、戦前の前は野球や相撲大会が開催されるなど、普通の島民の暮らしがあったことや、遺骨収集の歴史について学び、翌日に入間基地から硫黄島に出発した。搭乗した輸送機の座席は、パイプフレームに布張りの簡易的なもので、会話ができない程の騒音で、耳栓をして二時間半ほどかけて到着した。



一般人の渡島は厳しく制限されてある硫黄島だが、事業に参加するにあたり、特別に許可され、到着後は、移動と同時に硫黄の独特の匂ひを感じながら慰霊祭の会場に向かった。硫黄島は七十七年前に二万余りの尊い命が失はれた激戦の地。高島渉外委員長斎主のもと祖国や家族の為に犠牲となった方々に対する感謝と敬意を込めて慰霊祭を斎行した。参列者は地下壕の中で水を激しく求めたであらう英霊の為に慰霊碑に水をかけ、様々な物をお供へされてゐた。

硫黄島は現在も硫黄が噴出してをり、場所によっては百度以上の蒸気が上がり、地下壕の中は地熱でサウナ状態。手掘りの壕は狭く、決して大きいものではなく、入っていると一分も経たないうちに汗がにじんでくる。このやうな中で一ヶ月の間、潜伏して戦つてゐたと思ふといたたまれない。また、銃撃の後の残る壕や敵の砲弾がめり込んだ砲身も残つてをり、過酷な状況で激戦が行はれた様子が伺へた。

遺骨収集は未だに道半ばであり、日本がこれまでに収容できた遺骨は、一〇四三七人。半数以上の一〇一五〇〇人近くがいまだに見つかつてゐない。日本軍は、全長十数キロに及ぶ地下壕にこもる持久戦を展開し、多くの兵士は壕の中で亡くなつたとみられてゐるが、現在では、この壕を探し出すこと自体が困難な状況である。遺骨収集事業は、昭和四十三年の返還後に本格化した、この時点で戦後二十三年が過ぎてを

り、それまでに多くの壕は米軍の使用しやすいやうに埋められて整地され、どこにあるかも分からない状態だ。今回見せていただいた遺骨収集現場の壕は五メートル以上地面を掘つたところに発見されたものであつた。

命を懸けて国を守つてくれた方がゐたからこそ、今の平和な暮らしがあることを実感すると共に、未だにその亡骸が島に埋まつたままであることを再認識した。愛する祖国の為に散華された英霊に哀悼と感謝の誠を捧げる。

(広報副委員長 柳原 永祥)



青年神職と歩く「伊勢の神宮」

令和四年八月十日（十一日の両日）、皇學館大学・國學院大學の学生を対象とした事業「青年神職と歩く『伊勢の神宮』」を開催し、両大学より二十一名の参加があった。本事業は、学生等が「日本の伝統文化の大切さを学び、神域の清浄なる空気を肌で感じて、豊かな感性を磨くこと」を期して、神宮を始め関係する諸施設をめぐる、青年神職が解説を行ふと云ふ企画であり、感染症の拡大防止策も含めて検討を重ね、開催に臨んだ。



背景には、コロナ禍により「人と人との繋がり」が稀薄になってゐる側面を憂ひ、「日本人が祭りや伝統行事のなかで大切にしてきた『集ひの文化』を未来ある学生に伝えたい」との想ひがあり、併せて神宮啓発委員が率先して教化活動の実践に務めることで、次世代を担ふ青年神職の自覚へと繋げていくことも視野に入れて「自らの研鑽」も掲げた。

両大学からは、感染症の影響で講義等の運営方法がリモート中心となつてゐたこともあり、体験型学習の機会に賛同を得られた。募集については、学内のメール配信システムで全学生に告知を行ったほか、キャンパス内にチラシを配置。皇學館大学にはバス等の手配も快く引き受けていただけだ。



丁寧な説明を随所で実施

初日は宇治山田駅集合、先づ皇大神宮（内宮）を参拝し、御神楽を奉納した。域内では宇治橋前から三班に分かれ、同委員が要所で解説を行ひ、参加者は熱心に耳を傾けてゐた。

その後、来年御創建百年の節目を迎へる倭姫宮を参拝した。また、神宮の自給自足を大切とするその精神に近づくと、神宮の祭典で天照皇大神神をはじめとする神々に奉奠される米や塩を作つてゐる神宮御料地の神宮神田や御塩浜を見学することともに、御塩殿神社（内宮所管社）を参拝した。

夕食後には、内宮夜間参拝を実施。月明かりが照らすなか参加者は昼間と趣の異なる参道を踏みしめ、神妙な面持ちで拝礼した。同行した委員もその様子を見て深い感動を覚えた次第である。

翌十一日は、豊受大神宮（外宮）に参拝。前日同様に域内では同委員が解説を行ったほか、外宮勾玉池池畔の「せんぐう館」を拝観し、展示品や遷宮諸祭に関する解説も行った。学生等は間近でみる外宮正殿原寸大模型の迫力に驚いた様子だった。

その後、場所を神宮会館へと移し学生との交流会を開催。今回は事前に質問用紙を配布して参加者に記入してもらひ、各委員が回答する形で話を広げていった。参加者からは、「神職の奉仕で一番大変なことは何ですか？」「神職として尤もやり甲斐を感じる瞬間はどのような場面ですか？」「神道の魅力とは？」「学生時代にやっておくべきことは？」等三十以上の質問が集まり、役員・委員は自らの言葉で回答した。



充実した内容、満足度も高く

参加者にアンケートを行ったところ、凡そ九割が「たいへん満足した」、解説について「凡そ理解できた」と回答してゐる。

「ただ参拝するだけでは知り得ないことを知ることができ、とても充実した日となりました。」「本などには載つてゐないやうな貴重なお話を聞くことができ、大変興味深かったです。内宮での夜間参拝は、一生忘れることのできない体験となりました。」「等の回答があり、満足度が高かつたことが窺へる。反省点はあるものの青年会活動の今後の励みとしたい。

また、今事業を通して、神宮をはじめ神社本庁、両大学、そして私たち青年神職が学生のために力を結集したこと、かうした繋がりの中で強く結ばれた「絆」こそ、今斯界の発展に強く求められてゐるのだと改めて実感した瞬間であつた。

（神宮啓発委員長 上野 潤）



令和四年度夏期セミナー

令和四年八月三十日、三十一日の両日に亘り、神社本庁を会場に令和四年度の神青協夏期セミナーが総勢百八名参加のもと開催された。例年同時期に神社本庁に参集して行つてゐた本研修会は、新型コロナウイルス感染症拡大を鑑み、直前でハイブリット形式へと変更を余儀なくされたが、対面での開催は実に三年ぶりとなった。



「意識改革〜多様化する社会〜」をテーマに開かれた本研修会。第一講では皇学館大学文学部神道学科助教高野裕基氏をモデレーターに太宰府天満宮権禰宜の高山博子氏、荘内神社権禰宜の石原和香子氏によるパネルディスカッション、第二講にスターバックスコーピージャパン元CEOの岩田松雄氏、第三講に神社本庁総合研究所総合研究部長の浅山雅司氏がそれぞれ講師を務

め、自らの体験や新たな活動、自身の存在理由や使命を意識することの大切さや、変化する社会に於ける神社界の取り組みや課題について語った。

社会構造の変化が目まぐるしく進む昨今、神社の護持運営に於いても時代の変化に適応するための課題が山積してゐる。今回の研修会では現代社会での神社での様々な取り組みや制度等の実情を把握し、神社の新たな可能性に就いて考へる契機となつたのではないだろうか。

本研修会では、神社を盛り上げ未来に存続させていくためには個々の意識の変化や、運営体制自体をいかにして多様化する社会に適応させられるか、変へてはいけない部分もしっかり理解をした上でそれらを残していけるか、その重要性が問はれた。



コロナ禍に於ける人との交流の在り方、地域活性化の方策を模索する他社での諸施策を事例と共に学び、いま我々にどのような意識改革が求められてゐるのか改めて考へる必要がある。

キャッシュレス決済に於いても、利便性や利益性のために促される形で利用するのではなく、それぞれの仕組みや対象となる法制度をしっかりと理解した上で活用しなければならぬこと、注意すべき点について解説がなされ、質疑応答では多くの疑問が投げかけられ、受講生それぞれが問題意識を持つてゐる様子が窺へた。

コロナ禍で様々な不便を強いられる生活が続いてゐるが、神社護持運営に於る自身の意識を見直す良い機会となつたであらう。我々がいまできる行動を改めて考へ、この多様化する社会に強い意識を持つて日々の奉仕に役立てて参らう。

(教化委員長 小佐野 正崇)





神職のための神宮研修会

令和四年九月二日、「神職のための神宮研修会」と題し、ウェブ研修会を開催した。

本研修は「斯界を担ふ青年神職のために」地域に於ける神宮奉賛の要として」を主題に掲げ、地域の神職による氏子崇敬者に対するの懸命な啓発活動が本宗奉賛活動の要であることを再認識すべく、神宮大麻全国頒布百五十周年の佳節に際し、一層全国規模で神宮に関する知識と意識を高めていくことを期して実施した。

講師は神宮権禰宜 小針孝裕氏（神宮司庁頒布課長、神宮権禰宜 中西直樹氏（神宮司庁 広報課長補佐）が務められ、小針氏は「神宮大麻について」、中西氏は「神宮と式年遷宮について」と題して講義いただいた。

第一講では小針氏より、まづ神宮が百二十五社から構成されてあることや御鎮座の由緒について説明、年間凡そ千五百回を数へる祭典が斎行されてあることや神嘗祭に付随する諸儀、また清浄が求められる神饌の御料に関し、神宮に於る自給自足を紹介された。

その上で、幕末から神宮大麻誕生までの時代背景や神宮大麻全国頒布の歴史的経緯、更には神宮官制や戦後の神道指令等にも触れつつその変遷等について詳しく解説、ご自身の経験談なども交へながら受講生が理解しやすいよう進行にお気遣ひを戴いた。最後に神宮大麻頒布の歴史を振り返り「先人の皆様方が尽力されて今日に至っ

てをり、さまざまなことがあつての百五十年である。」と結んだ。

第二講では中西氏より、先づ神宮の御鎮座の歴史や勅使参向、奉幣と云ふ点から天皇による祭祀が行はれてあることを説明。続いて、年間の恒例祭の中でも最重儀とされる神嘗祭について、神宮の全てのお祭りは神嘗祭のためにあると云った点をご自身の経験をもとに解説された。また、二十一年一度の式年遷宮は、できうる限りの衣食住を新たにし、社殿の造替等を伴ふ「大神嘗祭」としての性格にも触れられ、講義の最後には、様々な人の気持ちが変わる正月の効果を例に、「式年遷宮によって国の空気が改まる」との考へを述べられ、数年後に始まるであらう次期式年遷宮諸行事への協力を呼びかけられた。

今回遠隔型研修としたことで、これまで遠方等の理由により参加しづらかった会員にも研修会参加の機会を提供することができ、凡そ百二十名の参加となった。

地域の神宮奉賛の要たる神職にとつて、神宮啓発の意識を全国規模で高めていくため、今後ものやうな自己研鑽の機会は必要不可欠である。今研修会はそのひとつの好機会となったのではないだろうか。

近年、人口減少や過疎化に加へて神棚がない家庭も多く見受けられ、頒布状況は決して望ましい状態にあるとは言ひ難い。このやうな時代だからこそ青年神職一同が、「和」の力を以て神道の本義を損なうこと

なく、来たるべき次期神宮式年遷宮や神宮大麻増体に向け、機運を高めていかねばならないと強く感じた次第である。

（神宮啓発委員長 上野潤）



沖縄本土復帰五十周年記念事業 沖縄戦全戦歿者慰霊祭

令和四年十月二十七日、沖縄本土復帰五十周年記念事業として、沖縄戦全戦歿者慰霊祭を斎行した。

沖縄県護国神社にて、加地宮司を斎主として全国単位会より四十五名、神青協より三名、舞人に護国神社の前原権禰宜、伶人に九州地区協議会より五名の奉仕を頂き斎行した。参列に沖縄県神社庁の新垣副庁長を始め、神青協顧問七名、全国氏子青年協議会八名、全国単位会五十二名と多くの方々に参加いただいた。

当日は晴れ渡る中、黙祷、国歌斉唱から始まり、修祓、献饌、宮司による祭詞が奏上された。続いて神青協より幣帛を奉じ、神青協会長により祭詞が奏上され、舞の奉奏、『海ゆかば』を斉唱し、玉串奉奠、撤饌と全てが滞りなく厳粛に斎行された。

神青協では、昭和三十三年より本土復帰運動に取り組み、昭和四十七年に「波照間の碑」を建立したのを始め、国旗掲揚塔の建設、「聖寿奉祝の碑」の建立、更には各周年に慰霊祭を斎行してきた。本年の本土復帰五十周年の節目に、本土防衛の為命を賭された二十万以上の御霊に向かひ、多くの同志と共に慰霊の誠を捧げることができた。今後も活動の歴史を忘れることなく、更に未来へと、平和の尊さ、そして英霊への感謝の心が紡がれることを切に願ふ。

(渉外副委員長 黒木 興輔)



沖繩本土復帰五十周年記念事業
沖繩戦全戦歿者慰霊祭次第

日時 令和四年十月二十七日
齋場 沖繩県護国神社

祭典次第

当日早旦齋場を装飾す
時刻宮司以下祭員参進 是より先手水の儀あり
次に宮司以下祭員所定の座に著く

此の間奏楽

次に黙禱

次に国歌斉唱

次に修祓の儀

次に宮司一拝

次に副齋主以下祭員神饌を供す

次に宮司祭詞を奏す

次に副齋主神青協よりの幣帛を奉る

次に神青協会長祭詞を奏す

次に舞を奏す

次に海ゆかば斉唱

次に宮司玉串を奉りて拝礼

次に神青協会長玉串を奉りて拝礼

次に来賓代表玉串を奉りて拝礼

次に副齋主神青協よりの幣帛を撤す

次に副齋主以下祭員神饌を撤す

次に宮司一拝

次に宮司挨拶

次に神青協会長挨拶

次に各退下

記念撮影

此の間奏楽

此の間奏楽
諸員之に做ふ

祭典奉仕者

齋主

副齋主

全

全

全

全

神青協代表

祭員

祭詞奏上

献幣所役

会長前導・祭詞後取・玉串後取

沖繩県護国神社

神道青年全国協議会

神道青年全国協議会

沖繩県神道青年会

全国会員

神道青年九州地区協議会

神道青年全国協議会

神道青年全国協議会

神道青年全国協議会

神道青年全国協議会

神道青年全国協議会

宮司

副会長

九州地区理事

会長

石底直樹

加治順人

藤原大修

黒木興輔

小林慶直

湯浅迪彦

大鳥居良人

祭員名簿

氏名	所属	奉仕神社	職掌	所役
一 加治 順人	宮崎	沖繩県護国神社	宮司	斎主
二 藤原 大修	宮崎	盛岡八幡宮	副斎主・幣帛撤	神青協
三 黒木 興輔	宮崎	御年神社	副斎主・幣帛撤	九地協会長
四 石底 直樹	沖繩	普天満宮	副斎主・右陪膳	沖繩県会長
五 宮田 卓	福井	和歌山	斎主	
六 井戸 大輔	福井	熊野那智大社	斎主	
七 石川 史嗣	大分	太宰府天満宮	斎主	
八 吉田 実彦	三重	春日神社	斎主	
九 吉田 常彦	三重	伊奈富神社	斎主	
一〇 菊地 康倫	山形	大蔵神社	斎主	
一一 石津 紀祥	静岡	日吉神社	斎主	
一二 千種 太陽	兵庫	柏原八幡宮	斎主	
一三 河崎 智洋	石川	大野湊神社	斎主	
一四 鈴鹿 迪胤	奈良	高野神社	斎主	
一五 若森 治彦	岐阜	若宮八幡神社	斎主	
一六 野口 貴令	愛媛	伊佐蘭波神社	斎主	
一七 佐師 慶保	宮崎	鶴戸神社	斎主	
一八 洲上 智之	茨城	大洗磯前神社	斎主	
一九 熊代 伸哉	香川	田村神社	斎主	
二〇 吉沢 壮一郎	大阪	露天神社	斎主	
二一 藤巻 普紀	山梨	住吉神社	斎主	
二二 吉見 仁	愛知	片山八幡神社	斎主	
二三 諏訪達 裕之	島根	智伊神社	斎主	
二四 三浦 寛紀	福島	若上神社	斎主	
二五 谷藤 大典	岩手	諏訪神社	斎主	
二六 松田 直隆	長野	武水別神社	斎主	
二七 東條 貴史	京都	八坂神社	斎主	
二八 石川 昌隆	宮城	熊野神社	斎主	
二九 古谷 意誠	千葉	諏訪神社	斎主	
三〇 久保田 城司	広島	東照宮	斎主	
三一 馬場 裕一	埼玉	久伊豆神社	斎主	
三二 小笠原 佐	埼玉	田名部神社	斎主	
三三 宮崎 祥梧	徳島	宇佐八幡神社	斎主	
三四 川尻 国広	秋田	総社神社	斎主	
三五 荒木 直弘	北海道	尻岸内八幡神社	斎主	
三六 増田 源弘	神奈川	伊勢山皇大神宮	斎主	
三七 大島 仁志	佐賀	高木八幡宮	斎主	
三八 平岡 晶太	富山	廣田神社	斎主	
三九 米原 尊信	鳥取	倭文神社	斎主	
四〇 坂本 尚文	熊本	大津日吉神社	斎主	
四一 齋藤 剛	東京	八幡神社	斎主	
四二 小堀 巧人	東京	島田八幡神社	斎主	
四三 佐山 寿実社	新潟	牛尾神社	斎主	
四四 福田 雅俊	岡山	羽黒神社	斎主	
四五 西田 周司	奈良	檀園神社	斎主	
神青協代表				
乙 小林 慶直	新潟	白山神社	斎主	
甲 湯浅 迪彦	岡山	中山神社	斎主	
舞 大鳥居 良人	東京	龜戸天神社	斎主	
伶人 前原 万岐	沖繩	沖繩県護国神社	斎主	
一 古川 晴茂	佐賀	金刀比羅神社	斎主	
二 藤岡 敬士	熊本	諏訪八幡宮	斎主	
三 進藤 紀久	長崎	諏訪神社	斎主	
四 鶴田 明久	鹿児島	柏原神社	斎主	
五 御田 幸嗣	福岡	太宰府天満宮	斎主	

沖繩戰全戦歿者慰霊祭宮司祭詞

掛介麻久母畏俊沖繩県護国神社乃御前尔先乃大東亜戦争尔沖繩乃戦尔醜乃御
 楠登身退里麻世留靖国護国乃御霊等乃大前尔裔主敬比白佐久御国肇米氏此方
 未陀例无伎大戦里氏早七十七年汝命等祖国乃為同胞乃為尔登戦場尔出征陸
 尔海将空尔雄々志久闊比神上里麻世留波最尊伎事奈里介里 昭和二十年三
 月二十六日慶良間諸島敵乃上陸与里激志伎戦比登奈里兵士乎始米果氏波老
 若男女乃区别无戦閑母敵乃砲撃尔身失世給比国運乎賭介志大戦母天皇乃大
 詔以氏終戦閑其時乃混乱登悲志美母国民乃努力登汝御霊等乃御勳功以氏今耶
 世界乃国々尔立勝里氏有里汝等乃御功績波萬代懸介氏語里繼礼給布倍志此礼
 乎以氏神道青年全国協議会会長小林慶直伊他青年神職等今年波沖繩本土復帰
 五十周年乃佳年乎迎閑汝命等尔感謝乃誠手捧宜沖繩戰全戦没者慰霊祭仕奉良
 久登会員諸々参集比御饌御酒海川山野乃味物爾故郷乃特産品乎献奉拜泰里御
 靈慰乃舞舞乎奏伝御霊永久尔御国乃鎮登鎮坐志氏天皇乃大御代乎堅誓尔常誓
 尔裔泰里幸衣泰里給比四方乃海波風不立浦安乃邦登守護里導伎給比氏縁深伎
 御遺族乎始米天下乃国民尔至留迄守里幸衣給比神道青年全国協議会乃署名弥
 高久肇宜志米給閑登恐美恐美母白須

沖繩戰全戦歿者慰霊祭神青協会長祭詞

掛介麻久母畏俊沖繩県護国神社乃大前尔神道青年全国協議会会長小林慶直
 恐美恐美母白佐久先乃大東亜戦争尔於比氏沖繩諸島我御国乃盾登成里汝命等
 波敷島乃大和心尔雄々志久母清伎明真心以氏御国登親族家族乎守里年登玉
 乃緒乃限里乎尽久志氏務米乎果多志給比今乃日本乃崇波汝命等我捧宜給比志
 尊伊御命乃上尔成里介里斯久氏今年波志母沖繩県祖国復帰与里指折里数閑氏
 五十年乃節目乃年泰礼姿全国乃神仕乃若人等集比氏献奉留幣帛乎安幣帛乃足
 幣帛登平良介久安良介久諾比聞食志氏今母将来母天皇乃大御代乎手長乃御代
 乃嚴志御代登堅誓尔常誓尔裔泰里幸間泰里給比天下四方乃国民尔至留迄守
 里導伎給比氏互尔睦睦和美津津浦安乃世乎修理里固成志子孫乃八十続尔至留
 迄五十續八桑枝乃如久立崇衣志米給閑登恐美恐美母白須

来賓名簿

氏名	団体名	役職
新垣 義夫	沖繩県神社庁(普天満宮 宮司)	副庁長
日下 修一	神道青年全国協議会	顧問
土師 幸士	神道青年全国協議会	顧問
長友 安隆	神道青年全国協議会	顧問
北川 晋史	神道青年全国協議会	顧問
佐野 貴史	神道青年全国協議会	顧問
田中 芳明	神道青年全国協議会	顧問
金田 祐孝	神道青年全国協議会	顧問
鈴木 登代秀	全国氏子青年協議会	会長
今富 一義	全国氏子青年協議会	副会長
羽生 久美子	全国氏子青年協議会	副会長
武本 延美	全国氏子青年協議会	副会長
高井 勇志	全国氏子青年協議会	副会長
内田 晋次	全国氏子青年協議会	副会長
田中 孝明	全国氏子青年協議会	理事
菱 功	全国氏子青年協議会	理事



参列者名簿

氏名	所属	奉仕神社	職掌
内海 通人	東京	東大島神社	御宜
篠 泰比呂	東京	水川神社	御宜
高島 俊亮	東京	天祖神社	御宜
浪波 諒	東京	大國魂神社	御宜
前田 典文	東京	大國魂神社	御宜
志村 隆吉	神奈川	森戸大明神	御宜
守屋 幸弥	神奈川	琴平神社	御宜
鈴木 智之	埼玉	水川神社	御宜
平田 長保	千葉	高瀬神社	御宜
鈴木 央風	千葉	八坂神社	御宜
松田 絃和	茨城	筑波山神社	御宜
小佐野 敬則	栃木	白鷺神社	御宜
北方 宏和	山梨	富士山小御殿神社	御宜
芦原 北海	北海道	旭川神社	御宜
田湯 紳司	宮城	新琴似神社	御宜
深谷 瑞比古	福島	磐梯神社	御宜
加藤 直昌	福島	三島八幡神社	御宜
吉田 芳樹	福島	春日神社	御宜
丹治 翔太	福島	福島稲荷神社	御宜
鈴木 相太郎	三重	大宮神社	御宜
千秋 季剛	岐阜	伊奈波神社	御宜
河村 忠伸	静岡	秋葉山本宮秋葉神社	御宜
星野 孝明	岐阜	常葉神社	御宜
清住 邦康	長野	深志神社	御宜
押見 友仁	長野	諏訪神社	御宜
北居 邦洋	新潟	西代神社	御宜
樋口 忠親	奈良	廣瀬神社	御宜
上野 潤	和歌山	熊野速玉大社	御宜
安田 祐紀	島根	高濱神社	御宜
泰 祥岳	岡山	長浜神社	御宜
日幡 博行	岡山	天津神社	御宜
内田 久紀	岡山	空稻生神社	御宜
白石 憲一	山口	琴崎八幡宮	御宜
猪熊 兼高	香川	白鳥神社	御宜
柳原 大朗	愛媛	吹揚神社	御宜
西高辻 信宏	福岡	太宰府天満宮	御宜
久富 真道	福岡	波上宮	御宜
崎山 喜理	福岡	普天満宮	御宜
平良 真吾	沖縄	沖繩県護国神社	御宜
松元 孝太	沖縄	普天満宮	御宜
比嘉 慎也	沖縄	普天満宮	御宜
新垣 克彦	沖縄	普天満宮	御宜
関口 幹久	沖縄	沖繩県護国神社	御宜
中山 岳洋	神青協	神社本庁	御宜
吉田 健真	神青協	神社本庁	御宜
永井 承輝	神青協	神社本庁	御宜

沖縄戦戦死者遺骨収集事業

令和四年十月二十八日、前日の沖縄戦戦死者慰霊祭に続き、沖縄戦戦死者遺骨収集事業を開催した。

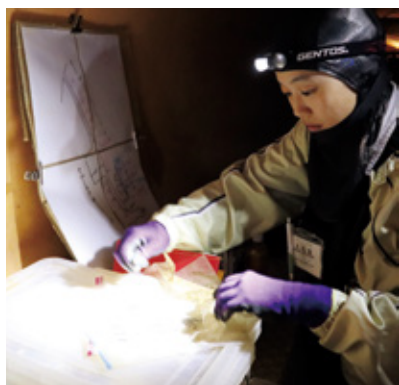
先の大戦に於いて命を賭された英霊の遺骨の多くが、戦後七十年以上過ぎた今もなほ収容されずにある。激戦の地となった沖縄県では、ご遺骨一八八一―二三柱に対し、二八七五柱が未収容として放置されている。

今回、特定非営利活動法人空援隊が主催する、旧海軍司令部壕遺骨発掘収容に参加する形で事業を開催した。前日慰霊祭にて奉仕または参列した中から、神青協役員、全国単位の希望者、氏子青年協議会、総勢四十名が参加した。

発掘現場となった旧海軍司令部壕の周辺は公園として美しく整備されてをり、壕内は資料館として一般公開されている。我々の多くは初めての参加であり、空援隊の説明を受けて慎重に作業に取り掛かった。

作業は、壕跡に堆積してある土を掘り起こし、その土を振るひに掛けて遺骨や遺品の有無を確認し洗浄する。残った土は土嚢袋に詰めて、既に調査を終えた個所に積み上げていく。狭い壕内で窮屈な体勢を続け、酸欠になり乍ら作業を進め、汗だくになる中数時間作業を進めると、数点の遺骨や遺品を発見することができた。途中大きな大腿骨を発見することもでき、一日のみの参加であったが、実体験を通じ遺骨の眠る実状を感じることができた。

空援隊の方々には、二十年以上この遺骨収容を活動として続けてある方もをり、今回も一週間に亘り作業を続けてゐた。我々是一日のみ作業といふことで、あくまで体験程度の経験であったが、今後も神青協として少しでも活動に助力し、英霊の慰霊に努めたい。
(渉外副委員長 黒木 興輔)



臨時総会

令和四年十一月十七日、臨時総会が開催された。今回の臨時総会も本年の定例総会と同様に、新型コロナウイルス感染症の感染が拡大してあることに鑑み、神社本庁とウェブのハイブリッド形式での開催となった。開会式では小林慶直会長の挨拶の後、神社本庁教化広報部部長牛尾淳様よりご祝辞を頂戴した。臨時総会では守屋隆広議長、北川真喜子副議長の進行により議事日程が進められた。



審議では、次期会長選出に関する件、次期監事選出に関する件、いずれも次期人事に関わる事項として一括審議となった。十月二十六日に開催された次期会長・監事選考委員会の委員長を務めた日比野悌明君より、次期会長に東京地区・東京都の大鳥居良人君、次期監事に東北地区・福島県の吉田芳樹君、中国地区・岡山県の湯浅迪彦君、北海道地区・北海道の北方宏和君が選出されたことが報告された。各候補者が全会一致で承認された後、次期会長に選出された大鳥居良人君が挨拶を行ひ、感染症だけでなく、我が国を取り巻く状況は厳しいものがあるが、困難はいつの時代にもあった。会員の数だけ考へ方の違いもあるかもしれないが、会員同士が理解を深め、同じ方向に向き、より良いものに高め合ふことこそ大同団結であると考へてゐる。立場や環境の違いがあつても、全国各地の会員が青年会活動に向き合ひ、日々の神明奉仕に活かしていける会としていきたい旨の決意が述べられた。



全ての審議を終へ、守屋議長、北川副議長は、総会の議事進行を無事に務められたことを代議員に感謝し、コロナ禍の中、会務を執行した小林会長の労をねぎらひ、次期大鳥居会長予定者への激励の挨拶を述べ、降壇し、議案審議が納められた。続く閉会式では、小林会長の挨拶の後、千秋季嗣参与の先導により聖寿の万歳を奉唱し閉会した。

引き続き、令和四年度事業に関する報告会が行はれた。先づ、教化委員会の小佐野正崇委員長より、正月の神社の助務奉仕者を対象として作成された神社おもてなし心得動画について説明がなされ、実際に動画を見てもらひ、各地区単位会への周知を呼び掛けた。次に広報委員会の柳原永祥副委員長より本年制作した竹島の動画、北方領土の碑の動画について説明がなされ、こちらもそれぞれ実際に動画を見てもらひ報告会は終了した。

(総務局次長 北方 宏和)



顧問会

令和四年十一月十七日（木）臨時総会終了後の午後五時より、明治記念館末広の間に於いて、十二名の顧問の先輩方をお迎えし、現役役員二十六名出席のもと顧問会を開催した。令和二年度・三年度の顧問会は新型コロナウイルス感染症の状況に鑑み中止されたので、三年ぶりの開催となった。

はじめに小林慶直会長先導により神宮を巡拝し、続いて会長挨拶。その後、令和二年度顧問会の開催が見送られたことから、前期会長である鳥取県・宇倍神社宮司金田祐季先輩より、前期会務運営に対する協力の御礼と令和二年度活動報告を交へてご挨拶をいただいた。

次に顧問を代表し、北海道・札幌諏訪神社宮司北方幸彦先輩より、ご自身が会長であった時の体験談を交へて、今期の役員への慰労と残り任期の激励、そして次期役員への期待のお言葉を頂戴した。

令和三年度・四年度の活動報告として、オンライン地区訪問会、神社おもてなし心得動画作成及び配信、「波照間の碑・竹島之碑・北方領土の碑」動画作成及び配信、硫黄島訪島事業、沖縄本土復帰五十周年記念事業沖縄戦全戦死者慰霊祭、神社フォトコンテスト、神宮写真展全国各地展開など、各事業の活動を総務局はじめ各委員会より記録写真を用いて報告を行った。なお、活動報告に先立って二年間の活動をまとめた

動画を上映した。

最後に、臨時総会に於いて、東京地区より大鳥居良人君が次期会長として、東北地区より吉田芳樹君、中国地区より湯浅迪彦君、北海道地区より北方宏和君が次期監事としてそれぞれ選出されたことを報告し、大鳥居次期会長より「七十年を超える神青協の歴史を全身全霊で受け止めて、力の限り活動に邁進する」旨の抱負と挨拶を申し述べた。

慣例では顧問会に続いて懇親会を開催するが、今年も未だ新型コロナウイルス感染症の終息には至っていないという状況に鑑み、懇親会の開催は控へ、閉会となった。これまで通りの形で顧問会が行へなかったことは残念であったが、顧問へ活動報告をする場が今期中に持たせたことは意義のあることだと感じた次第である。今後とも先輩諸賢からのご指導とご鞭撻をお願い申し上げる所存である。

（総務局員 宮崎 真二）



古殿地清掃奉仕



令和四年十一月十九日、神宮古殿地清掃奉仕を開催した。今事業は、「神宮古殿地清掃奉仕を通して、清らかな「こころ」と奉仕の精神を培ひ、天照皇大御神の神恩に報謝するとともに、次期式年遷宮に向けて尊崇の意識涵養を図ること」を目的に掲げた。

また、今期神青協では関係団体との繋がりにより強固なものへと発展させることが、今後の斯界発展のために重要であると捉へ、今回全国氏子青年協議会と共に清掃奉仕を実施する運びとなった。

今回は平成三十年に同奉仕を実施してをり、今期に入り早々に企画してゐたところ、新型コロナウイルス感染症の影響により、二度に亘り延期となり開催が心配されたが、神宮当局のご理解ご協力を賜り四年ぶりとなる清掃奉仕が叶った。

当日は秋晴れに恵まれ、全国氏子青年協議会 鈴木登代秀会長をはじめ会員三十六名、神青協からは小林会長をはじめ千秋参与、本庁総務局員、神宮啓発委員、会員関係者等十四名、総勢五十名が参加した。

開講式では主催者として小林会長が神宮をはじめ参加者のご協力に対し謝辞を述べ「神宮古殿地は我々神職でも普段は入ることのできない神聖な場所。その有り難さと喜びを感じながら、怪我の無いやう安全に努めて清掃奉仕に臨んで欲しい。」と挨拶。先づ一同は皇大神宮（内宮）にて御垣内参拝と御神楽奉納を行ひ、そのち参集殿へと移動し奉仕姿に改服、休憩を挟んだ後、隊列を組んで参進、手水を行ひ愈々内宮古殿地へと進んだ。

清浄な神域を肌で感じて清掃奉仕

古殿地は次期式年遷宮に於いて新たな御敷地となる神聖な場所である。奉仕者は神妙な面持ちで聖域の中へと足を踏み入れていった。紅葉の時期、斎庭は広汎圀に落葉がみられ、奉仕者は帚を用ゐるまたは直接手で落ち葉を拾ひながら一力所に集め、それを森の中へ返す作業を繰り返した。お白石の上を歩く感覚に、落葉を拾ふその両手に、そして目にする景観に、奉仕に携はった誰しもが特別な感動を覚えたに違ひない。また、要所での委員等の説明に奉仕者は感慨深く耳を傾けてゐた。

大人から子供まで真心込めて臨んだ清掃奉仕は、奉仕者にとって記憶に残る忘れられない体験となった。

心洗はれた後は晴々とした表情で

約一時間半の清掃奉仕を終へ、一同は参集殿へと移動、閉講式では全国氏子青年協議会鈴木会長が謝辞を述べ、次に千秋参与（神宮宮掌）が「皆さんの晴れやかな表情を見て嬉しく思ふ。神宮職員として感謝を申し上げたい。皆さんが今日の清掃奉仕を通して感じたことをご自身の胸に留めるだけでなく、是非とも地域の皆様にもお伝えください。そして次期式年遷宮の折には今日の清掃奉仕のことを思ひ出して欲しい。」と結び、次期式年遷宮に向けての協力を呼びかけ、全日程が終了した。

清掃奉仕を通して自身の心も洗はれた今回の事業。次世代を担ふ私たち青年神職が、神宮式年遷宮の「こころ」を守り伝えることとの意義は大きく、今後も斯界発展のため

に共に力を結集して歩んでまゐりたい、さう強く感じた次第である。

（神宮啓発委員長 上野 潤）



各地区報告

東京都神道青年会

【事業名】 定時総会
 【開催日時】 令和四年四月十八日
 【開催地】 東京都神社庁（東京都）
 【参加人数】 六十二名



【事業名】 祭祀舞研修会
 【開催日時】 令和四年六月二十日
 【開催地】 東京都神社庁（東京都）
 【参加人数】 五十六名
 【講師】 御田村洋子先生・小野亮貴先生



【事業名】 神道行法錬成研修会
 【開催日時】 令和四年八月二十四日
 【開催地】 綾広の滝（東京都）
 【参加人数】 二十二名
 【講師】

（道彦）篠直嗣先生・奥野雅司先生
 （助彦）清水祥彦先生・蔵重命弘先生・栗原健人先生・大野裕文先生



【事業名】 第一回教養講座
 【開催日時】 令和四年九月二十二日
 【開催地】 東京都神社庁（東京都）
 【参加人数】 三十四名
 【主 題】 日本水引ー日本人の折りの原点を知り未来へ繋ぐ
 【講師】 水引文化研究家・水引デザイナー・長浦ちえ先生

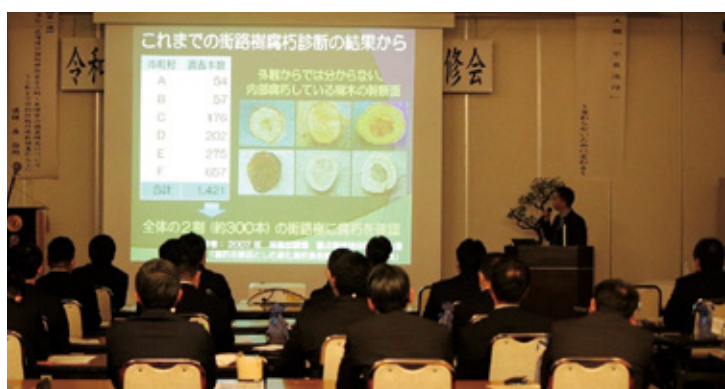


神青協一都七県協議会

【事業名】 第二十八回神青協一都七県協議会総会
 【開催日時】 令和四年八月二十一日
 【開催地】 清水園（埼玉県）
 【講師】 メインストリート・マネージメント・リサーチ合同会社 代表社員、公益財団法人渋沢栄一記念財団 維持会 員 松本博之先生



【事業名】 令和四年度北海道神道青年協議会研修会
 【開催日時】 令和四年十月十八・十九日
 【開催地】 北海道グリーンランドホテル サンプラザ（北海道）
 【主 題】 「不易流行」
 〓 変わらないために変わる〓
 【講師】 國學院大學北海道短期大学部 准教授 森悟朗先生・（地独）北海道立総合研究機構林業試験場森林環境部長 脇田陽一先生・レバンガ北海道 代表取締役社長 折茂武彦先生



北海道神道青年協議会

【事業名】 令和四年度北海道神道青年協議会研修会
 【開催日時】 令和四年十月十八・十九日
 【開催地】 北海道グリーンランドホテル サンプラザ（北海道）
 【主 題】 「不易流行」
 〓 変わらないために変わる〓
 【講師】 國學院大學北海道短期大学部 准教授 森悟朗先生・（地独）北海道立総合研究機構林業試験場森林環境部長 脇田陽一先生・レバンガ北海道 代表取締役社長 折茂武彦先生

東北六県神道青年協議会

【事業名】 令和四年度禊祓成会

【開催日時】 令和四年七月十一・十二日

【開催地】 いわき藤間温泉ホテル湊（福島県）

【参加人数】 五十三名

【講師】 株式会社経世論研究所代表取締役社長 三橋貴明先生・大國魂神社宮司 山名隆弘先生・福島県神社庁神道行政法錬成行事道彦 古積義永先生



神道青年東海地区協議会

【事業名】 令和四年度教化研修会

【開催日時】 令和四年九月十二日

【開催地】 ホテルクラウンパレス浜松（静岡県）・ウエブ

【主 題】 『神社を取り巻く環境の変化』

『急速に普及する情報技術と折り』



北陸神道青年協議会

【事業名】 北陸地区研修会

【開催日時】 令和四年七月二十二・二十一日

【開催地】 石川護国神社（石川県）

【参加人数】 五十人

【主 題】 アート思考

『心の豊かさを求めて』

【講師】 石川県立美術館 谷口副館長・現代アート美術館「カム・カナザワKAMUKANAZAWA」 林田館長



神道青年近畿地区連絡協議会

【事業名】 教養研修会

【開催日時】 令和四年八月二十三日

【開催地】 ホテル日航奈良（奈良県）

【参加人数】 三十九名

【主 題】 『心の源泉を求めて』

『神道のこころ』

【講師】 相川七瀬先生



兵庫県神道青年会

【事業名】 兵庫県神道青年会
再建五十五周年記念式典

【開催日時】 令和四年九月十二日

【開催地】 湊川神社（兵庫県）

【参加人数】 一〇八名

【主 題】 思いを繋ぐ

～百年後のロマンを胸に抱きて～

【講 師】

株式会社DO THE SAMURAI

吉田亮先生



神道青年四国地区協議会

【事業名】 第二十八回定例総会並び
に研修会

【開催日時】 令和四年六月八日

【開催地】 高松国際ホテル（香川県）

【参加人数】 三十五名

【主 題】 「更なる祭祀の厳修の為に」

【講 師】 國學院大學神道文化学部

元兼任講師後藤正明先生・小豆島へ

ルシーランド株式会社相談役 柳生

好彦先生

中国五県青年神職協議会

【事業名】 第五十五回中国地区氏子青年
神道青年合同研修会

【開催日時】 令和四年八月十八日

【開催地】 東広島芸術文化ホール

くらら（広島県）

【参加人数】 九十二名

【主 題】 神恩感謝の酒造り～酒に込められた神への想ひを感じる地～

【講 師】 日本酒造杜氏組合連合会 副会長 石川達也先生



神道青年九州地区協議会

【事業名】 第七十四回神道青年会九州地区協
議会総会

【開催日時】 令和四年五月九日

【開催地】 パシフィックホテル沖縄（沖縄県）

【参加人数】 三十六名



神社おもてなし心得動画紹介

明治五年、明治天皇の思召により、神宮大麻が全国に頒布されてから、令和四年で百五十年の佳節を迎へました。この節目を神符頒布・参拝促進に繋げるべく、社頭で頒布に携わる助務奉仕者を対象とした接遇向上動画を制作致しました。こちらの動画は、北海道神道青年協議会が作製した「神社おもてなし心得」冊子の一部を抜粋して制作してをります。

神社でのご奉仕は、一般的な会社やお店と違う部分があります。それは「神様」と「参拝者」の「中執り持ち」としての役割を担ふといふ事です。これは神職でも巫女でも助務奉仕者でも変わりはありません。参拝者が抱く神社の印象は接遇した人の印象に大きく左右されます。それぞれが「神社の顔」としての意識を持ち、参拝者と接する機会を大切にすることが重要です。社頭の立ち振る舞いや心構へについて動画にすることで、「言葉遣ひ」「挨拶」「心配り」「気遣ひ」等神社に於ける接遇向上の一助となれば幸いです。

神青協公式ホームページ及び公式YouTubeチャンネルに掲載致しますので、是非ともご周知

いただき、広くご活用下さいませうお願い申し上げます。又、助務奉仕者向け配布チラシも当会ホームページよりダウンロードできますので、併せてお願い申し上げます。

(教化副委員長 勝沼 達朗)



神社おもてなし心得

助務奉仕者向け解説動画

神社専用接遇マニュアル

こちらの QR コードからご覧ください

この動画は北海道神道青年協議会が作成した「神社おもてなし心得」冊子を基に、一部抜粋し制作しました。

助務奉仕者のみなさまへ

年末年始の助務奉仕にお申し込み戴き、ありがとうございます。

神社特有の接遇について動画にて解説しております。

QRコードよりアクセスの上、御確認下さい。

〇〇神社

助務奉仕者向け配布チラシ

祈願碑動画制作

現在ホームページに掲載してをります、「波照間の碑・聖寿奉祝の碑」「竹島之碑」「北方領土の碑」の各祈願碑について纏めた動画を制作致しました。これまでの神青協の活動を紹介するとともに、「竹島之碑」「北方領土の碑」については、それぞれの歴史についても触れ、領土問題の解説を加へてあります。

先人たちの想いを伝へ、現地へ行くことが叶はない方々を含め、今後実施される事業への理解を深める一助となれば幸いです。

神青協公式ホームページ及び公式YouTubeチャンネルに掲載しましたので、是非ともご周知いただき、広くご活用下さいませうお願い申し上げます。

(広報委員長 吉田 芳樹)



波照間の碑・聖寿奉祝の碑



竹島之碑



北方領土の碑



神青協広報活動の移り変り

昭和四十六年の発刊から令和四年をもつて五十年を迎えた神青協通信。その歴史の節目に、近年の広報活動と今後について考察すべく、平成二十九年から令和四年度にかけて広報委員長を経験した方を対象に取材を行った。

平成二十九年、三十年度 猪熊広報委員長長期

この頃の通信は事業の報告に力を入れてをり、言はば神青協の新聞のやうな位置付けであつた。それを手に取りやすい物にするべく写真にもこだはり、一面画像の表紙を付けて新聞から雑誌のやうな印象を与える冊子へと変貌させた。発行回数は一年に四回から三回に減らし、ホームページをリニューアルすると共にFacebook、Instagramの運用も行ひ、会員以外への発信も始めた。

令和元年度、二年度 湯浅広報委員長長期

通信は文字のフォントを柔らかいものにして、色をグレーにするなど、より見やすさを重視し、優しい印象を与えるやうにして、発行回数は三回から二回に変更した。協賛広告の位置を最後にまとめて、穴あけをやめるなど、よりシンプルにしていた。最新の情報はSNSで行ひ、通信でまとめた報告をすることが、この頃から確立される。対外的な情報発信にも力を入れて、全国の単位会で利用できるやうにプレスリリースのひな型を作成し、ホームページに掲載した。

令和三年度、四年度 吉田広報委員長長期

SNSでの情報発信が当たり前になり、ホームページを利用した各事業とのリンク、チラシのダウンロード等、更新頻度や広報の重要性が増した。そ

れに合はせてホームページをマイナーチェンジして、通信は第一号から最新号迄閲覧できるやうにした。神青協で建立してゐる「波照間の碑・聖寿奉祝の碑」「北方領土の碑」「竹島之碑」の三つの碑を更に分かりやすく説明するために動画を作製するなど、対外的な発信にも力を入れてゐるが、まずは全国の会員に伝えたいことを周知し、その先に会員以外へ発信することを意識してゐる。

三名の委員長経験者に聞き取りを行ひ、共通してゐると感じたものは、形に残る事業を行つてゐるといふ強い責任感である。出版物は会員の手元に残り、今ではホームページ上で過去の物を確認できる。SNSについてもアクセスすればいつでも閲覧可能だ。だからこそ全国で一番の広報誌を作成するといふ高い志を持ち、各事業の現状を伝えるべく撮影にも力を入れてゐる。また、広報誌はできるだけ手に取つていただきやすいやうに試行錯誤し、時流に合つた媒体での情報発信も取り入れてゐる。今までしてゐたことに加へて、新たな試みを継続していくことは並大抵のことでは無い。任期が終はり、他の担当者になつた際にも継続できるのか考へながら進めなければならぬ。取材した六年間だけでも大きく変容してゐることを考へると、様々な思ひが詰まつて今があることを改めて感じた。

記念すべき通信第一号を見てみると「靖国神社国家護持の法制化運動」の見出しとそれに関する記事のみの一ページで、事業報告も画像もない。しかし記事からは神職として、これだけは譲れないといふ思ひがひしひしと伝はってくる。これからも何を誰に伝えるのか。「伝える」ではなく「伝はる」やうに。時流に合はせて発信を続けていく。

令和四年度 中央研修会 開催要綱

一、主題 「想ひ」を繋ぐ

～受け継がれしものを次の世代へ～

一、趣旨

神代より続く皇統を奉戴する我が国では、神の恵みと祖先の恩に感謝するといふ先人との繋がりを大切に、個々を主体とするのではなく、集団の秩序や礼節が重視されてきた。その中で培われてきた神道や武道など道に共通するものは、「こころ」と「かたち」を重んじていることである。信心といふ「こころ」を祭祀といふ「かたち」で表現するやうに、皆同じ形を習ふのは、そこには先人たちの「想ひ」が込められているからである。それは様々な分野でも受け継がれ伝統となり、研ぎ澄まされていった。日常に使用してゐた物は、より長く使用できる美しい工芸品となり、阿波の人々は集団で一糸乱れぬ動きを続ける阿波おどりを愛した。

しかしながら人口減少や高齢化、過疎化の進行により、後継者不足の問題がより顕著になってきた。師弟や家族、世代を超え受け継がれてきた精神は希薄化し、従来通りの継承の形は通じなくなってきた。新型コロナウイルスの影響が更に拍車をかけ、コミュニケーションの時間は減り、様々なマーケットの規模が縮小することにより、問題は一層深刻さを増した。その一方、コロナ禍で当たり前の日常を奪はれたことは、大切なものを再認識する契機ともなった。人は繋がりの中で生き、喜びを共有し、生活を充実させていく。生活の中には受け継がれし「想ひ」が詰まっていることに気付かされた。とりわけ神社にはそれが集積されてをり、お社を護持運営していくことは氏子崇敬者の「こころ」を「かたち」にしていくなかに繋がっている。

本研修会では未来を担ふ青年神職が、先人より受け継がれた「想ひ」を次の世代へとバトンを繋げるやう、多岐にわたる事例から考察することにより、進むべき道を見極め、行動することを目指すことを開催する。自然災害の発生や感染症の拡大等、確実性から不確実性へと混迷の度を深める現在に於いて、神職としての確固たる信念を確立し、前進することが求められる。阿波おどりの歌ひ出しは、「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損々」、全国

の同志が学び取ったものを体現し、斯界で舞ひ踊ることを期する。

一、主催 神道青年全国協議会

一、主管 神道青年四国地区協議会

一、担当 徳島県青年神職会

一、期日 令和五年三月八日(水・赤日)～九日(木・先勝)

一、会場 徳島グランヴィリオホテル

〒七〇〇・〇九四一

TEL 〇八八・六二四・一一一

一、研修内容

第一日目

【第一講】 演題 「全てのいのちに優しい世界」

講師 安藤桃子先生(映画監督)

演題 「伝統は「守るべきもの」なのか」

講師 矢島里佳先生

【第二講】

演題 「次世代に繋ぐ」

講師 山田実先生(阿波おどり振興協会理事・長・天水運連長)

第二日目

【第三講】 演題 「折れない心」

講師 ニコラス・ベタス先生

【第四講】 講師 (武道家・元K-1ファイター)

一、日程 別紙参照

一、申込手順

①申込について

・同封の参加申込書を御記入の上、神社本庁総合研究所入所申込書(参加者一名につき一枚)を添へて、各単位会にて取り纏め、徳島県青年神職会中央研修会実行委員会事務局まで御送付下さい。修了證に記入する為、特に生年月日は正確に御記入下さい。初めて神社本庁総合研究所に入所される方は、申込書の他に所定の用紙の履歴書が必要です。

・締切に遅れた場合、神社本庁総合研究所に提出する名簿に記載致しかねますので、予め御了承下さい。但し、修了證が不要の場合や全日程受講できない方の神社本庁総合研究所入所申込書の提出は

不要です。参加申込書のみ御記入下さい。

・稀に神社本庁宛に直接送付をされる方がありますが、必ず各単位会取り纏めの上、徳島県青年神職会中央研修会実行委員会事務局に御送付下さいますようお願い致します。

②メール送信について

・単位会参加申込書名簿は、本文の記載内容が研修会参加者名簿に反映されますので、記載事項を御確認頂き、徳島県青年神職会中央研修会実行委員会事務局までメールにて送信して下さい。

③参加費納入について

・参加費は各単位会にて取り纏めの上、同封の郵便振替用紙をお使い頂き、締切日までに一括してお振り込み下さい。尚、紛失された場合は左記の口座へお振り込み下さい。

【郵便振替】 口座番号 〇〇500・6・102143

加入者名 徳島県青年神職会中央研修会実行委員会

一、参加費 一名 一五、〇〇〇円

一、締切 令和五年二月六日(月) 必着(厳守)

一、その他

①参加に当たって

・会場までの交通手段・宿泊等につきましては参加者各自にて御手配下さい。

・服装については、男性はスーツにネクタイ着用、女性はそれに準ずる服装と致します。

・筆記用具他、研修に必要なものは各自準備願ひます。

・本研修会は、青年神職として自己及び相互の啓発を期待するものです。参加に際しては充分に自身の考へを纏め、各位参加して下さい。

・全国の会員同士の親睦を図るため本研修会には懇親会が含まれてをります。感染状況を考慮し、万が一中止となった場合は開催日一ヶ月前を目途に各単位会に御案内致します。

②レポートの提出及び修了證の交付について(神社本庁総合研究所の修了證の交付を希望する方)

・修了に当たってはレポートの提出が必要です。※レポートテーマは主題と同じです。講義を受けての所感をお書き下さい。

・字数四〇〇字(語原稿用紙(神社本庁総合研究所指定用紙)一枚)

・神社本庁総合研究所入所申込書を提出し、研修会を修了した方には神社本庁総合研究所より修了證(一日間)が交付されます。

但し、遅刻・早退・欠席の場合、理由の如何を問

はず交付されません。

③申込後のキャンセルについて

・参加申込の後、二月七日から二月二十八日までに出け出のあった場合には参加費半額を返金致します。但し、二月二十七日以降の届け出については、諸準備の都合により返金致しかねますので、御承知お下さい。

④新型コロナウイルス感染症対策方針及び対策について

・政府又は徳島県により緊急事態宣言等が発せられた場合は本研修会を中止と致します。

※中止の場合の返金は③に準じ、宣言等が当日の場合、交通費等は申し訳ありませんが御負担願ひます。

・政府または自治体により、外出自粛要請が発せられた地域の会員は参加をお控え下さいますようお願い申し上げます。

・開催日当日に別紙チェックリストを提出して下さい。

※当日は受付にて体温測定を行いますので、時間に余裕を持っての到着をお願い致します。

※感染症拡大リスクを少しでも減らすべく、チェックできない項目がありましたら、大変恐れ入りますが研修参加を御遠慮頂きたく御承知お下さいます。万が一、本研修会に於いて感染者が確認された際は、チェックリスト記載の個人情報、保健所など関係機関へ情報提供することがございます。

※当日、三十七度五分以上の発熱がある場合は参加できません。

※感染症のリスク、重症化防止の為、ワクチンの接種を推奨致します。

・会場入口にアルコール消毒液を配置し、定期的に会場の換気と共用部の除菌を行います。

・参加者はマスクの着用・手指消毒の徹底をお願い致します。

一、申込書類送付及び、問い合わせ先

徳島県青年神職会中央研修会実行委員会事務局 宮崎 祥悟

〒七七一・〇〇二

TEL 〇九〇・五二七・六二二

FAX 〇八八・六八五・六四九四

メール takashimariya1023@gmail.com

創業 明治以前

各種御神符・守札 その他授与品全般

湊御神符奉製所

株式会社 湊

伊勢市神宮会館前 (〒516-0025)
TEL (0596) 22-2442 (代表)
FAX (0596) 28-8445
info@ise-minato.co.jp
http://www.ise-minato.co.jp



神社・仏閣向けの御守などの
授与品や縁起物を製造・販売

新日本工芸(株)

〒311-4153 茨城県水戸市河和田町3891
TEL: 029(251)0997代 FAX: 029(252)8287
E-MAIL: info@shinnihonkoge.co.jp
URL: http://www.shinnihonkoge.co.jp/

HASEGAWA
creation with warmth

授与品・記念品御奉製

株式会社 長谷川製作所

代表取締役 長谷川義實

〒340-0025 埼玉県草加市谷塚神町466-1
TEL: 048-921-1221 / FAX: 048-921-1515

創業 安政貳年

授与品・神具



御守袋・錦守・木札・紙札・絵馬
根付・神具・御装束・土鈴・記念品

株式会社 秋江

〒602-0056
京都市上京区堀川通り上立売下北舟橋町835
TEL 075(432)2255 FAX 075(441)8011
URL: http://www.akie-net.com

鳥居 安全性抜群
（全国に建立実績有り）

(有) 宮田 鉄工所

本社 社 千 932 0121
富山県小矢部市矢部町六六五
電話 〇七六六 一五四 一六二五〇
FAX 〇七六六 一五四 一六二四九
製造工場 千 929 0426
石川県河北郡津幡町竹橋ヌ八五
電話 〇七六一 八八〇 三三六
FAX 〇七六一 八八〇 三三七

神祭具 授与品 記念品奉製

株式会社 神路社

本社 千五六一 八六二 (私書函第二六号)
三重県伊勢市岩瀬二丁目五番二九号
電話番号 〇五九六 二四八 五八八
神苑 (東日本営業所)
〒一五〇〇三
東京都渋谷区恵比寿一丁目二六番十四号
電話番号 〇三三二 八〇六 七二〇
ACTビル四階
URL: http://www.kamijisya.co.jp



神社本庁 御用達
各神社

〈営業品目〉
●交通安全御守護
●開運招福鈴
●文鎮 金盃
●各種記念品類
●胸像・レリーフ・鋳造類

鈴木徽章工芸(株)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-12-1
TEL 03-3814-1811 FAX 03-3818-8332
E-mail: info@suzuki-kisho.co.jp
http://www.suzuki-kisho.co.jp



株式会社 民俗工芸

〒857-1162 長崎県佐世保市御本町18-1
TEL 0956-34-5500 / FAX 0956-34-5511
URL: http://www.minzoku.co.jp

《信用第一主義》

(株) 福岡奉製

神社御社頭授与品、御神矢、御守
御守袋、絵馬、木札、御神符
金属・樹脂御守

〒八三四 一〇八 一
福岡県八女市立花町山崎一九六一
電話 〇九四三 一三三 一三四一二
FAX 〇九四三 一四四 八八三

子どもと一緒に
手づくり神棚キット



クボデラ 株式会社

〒165-0027 東京都中野区野方4-44-10-3F
TEL 03-3386-1153 FAX 03-3386-1165
mail: info@kubodera.jp

強い仕事、誠実奉仕

本社 本 應 御用達
國學院大學 推薦店
明治神宮 指定店

瀬戸装束店

〔営業品目〕
●神職御装束 ●神樂装束 ●神社調度
●祭器具のすべて ●神前結婚式場神職設備

〒164-0001 東京都中野区中野3丁目10番5号
電話 03-3381-4927 FAX 03-3381-4927

取引銀行 郵便振替口座
三菱UFJ銀行 中野駅前支店 00120-7-557201
普通預金 No. 0359145

全国各神社御用達

神符・守札・木札・錦守・御守矢・交通安全守
集印帳・御守り袋・絵馬・その他各種御札
御守・奉書紙・書道半紙・耐水奉書
他各種和紙謹製

創業江戸時代後期 真心で奉仕する

今村紙業株式会社

〒409-3601 代表取締役 今村和弘
山梨県西八代郡市川三郷町市川大門6237-11
電話 055(272)0514
FAX 055(272)8818

おももり・調度品
(各種キャラクター御守製造)

 **株式会社 ユーカワベ**

京都店
〒607-8306
京都市山科区西野山中島井町74-1
TEL 075-501-1411 FAX 075-501-4480
E-mail yukawabe@oak.ocn.ne.jp

東京店
〒113-0021
東京都文京区本駒込1-13-5
TEL 03-3944-9311 FAX 03-3944-9312

創業百有余年
磨き、繋ぐ、百年の技
一体一体手づくりでお届けします

御朱印帳 木札・紙札・おみくじ
交通安全守・金襴御守
彫木守・絵馬・守護矢
その他各種授与品



株式会社 丸井紙店
〒409-3601 山梨県西八代郡市川三郷町市川大門763
TEL 055-272-0136 FAX 055-272-3966

日本の文化財を
確かに継ぐ

漆塗・彩色・鍍金具・各種工事

 **株式会社 小西美術工芸社**

東京本社
東京都港区芝4-4-5 三田ビル3F
電話 03-5766-1481 / FAX 03-3455-9250

日光支社
栃木県日光市所野2829-1
電話 0288-54-1198 / FAX 0288-54-1196

京都・吉祥院

全国社寺授与品・調度品総合奉産

 **東和奉産株式会社**

本社
〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町1
Tel (075) 691-3000 Fax (075) 691-3300
Email info@towahosan.jp
HP <http://www.towahosan.jp/>

北関東営業所
〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵町2508-16
Tel (029) 297-8077 Fax (029) 297-8076

揺れて
輝くお守り

オリジナルで作成できます。



株式会社クロスフォー
(東証スタンダード7810)

TEL:057-008-9640 (ナビダイヤル)
URL:<https://crossfor.co.jp/>



右側の二次元コードから紹介動画をご覧いただけます。

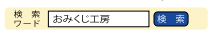
十二支おみくじ

置物になる縁起物に開運おみくじをプラス。

株式会社 おみくじ工房

〒516-0804 三重県伊勢市御園町長屋693
TEL 0596-22-8686 FAX 0596-22-4705
E-mail info@omikujis.net





発信し続けていきます。
コミュニケーションを

Next!
Real innovation

NAP ニホン美術印刷株式会社
名古屋支店

名古屋市中区東横1丁目9-4 (江口THビル) TEL (052) 962-0686
URL <http://www.nihonbijutsu.co.jp>

本社:大垣市西外側町2-15 TEL (0584) 78-2171 (代)
■東京営業所 ■大阪営業所

ゆとりとやすらぎの宿



神宮会館
伊勢神宮崇敬会

—ご宿泊に関するお問い合わせ—
〒516-0025
伊勢市宇治中之切町152
TEL 0596-22-0001/FAX 0596-22-1517

Instagram 好評配信中



神棚・モダン神棚

神棚の里

有限会社 静岡木工
静岡県榛原郡吉田町住吉 3217-1



編集後記

令和五癸卯年、明けましておめでとうございます。

依然猛威を振るふ新型コロナウイルスの影響により、各地で祭事の在り方や活動の制限がなされるようになって早三年もの月日が流れました。さうしたコロナ禍に於いても様々な活動を神青協では行っており、日本祭典への歩みに向けて熱意ある諸活動が為されております。広報委員会ではさうした取り組みを広く伝える為、より伝える広報を目指して発信してをります。

皆様にとって本会の熱意ある活動や想ひが少しでも伝はりましたら幸ひに思ふ次第です。

(広報委員 秦 祥岳)

『神青協通信』第146号
発行 令和5年1月1日
編集 広報委員会

発行者 神道青年全国協議会
発行所 東京都渋谷区代々木1-1-2
制作印刷 ニホン美術印刷株式会社



神青協 HP
(会員用 ID : shinsei PASS : hinomaru)



神青協 Instagram



神青協 Facebook

祭典用 傘

新色
誕生

鶯茶

ジャンプ式

4,620 円
税込・送料実費

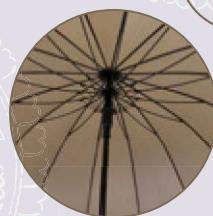
【仕様】

長さ：900 mm
親骨：金属（黒）700 mm / 16 本骨
開き直径：1200 mm
重量：608 g
生地：ポリエステル 100%

骨組：グラスファイバー（黒）
持ち手・石突き：合成木
露先：真鍮
※カバー無し



和傘をイメージした手元。



強風に強い16本骨。

白

手開き式

3,850 円
税込・送料実費

【仕様】

長さ：950 mm
親骨：金属（シルバー）750 mm
16 本骨
開き直径：1300 mm
重量：600 g

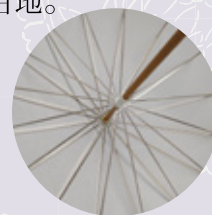
生地：ポリエステル 100%
骨組：金属（シルバー）
持ち手・石突き：合成木
露先：プラスチック
カバー付

ご好評 従来品の手開き式。

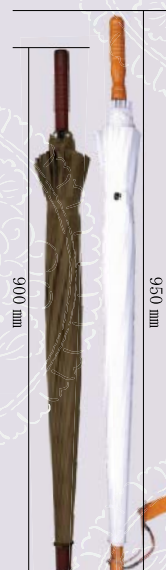
- 中棒が木製で軽量。
- ジャンプ式よりも開き直径が長く、正服でも雨に濡れにくい。
- 16 本骨で強風でもめくれにくい。
- 和傘をイメージした仕様
- シンプルな白地。



石突きは和傘をイメージ、頭紐と名札付。



強風に強い16本骨。



神道青年全国協議会推薦品

ご注文は、インターネット・電話・ファックスで承ります。

お支払いはクレジットカード・コンビニ決済が選択できます。

文化興隆 検索 <http://www.nihonbunka.or.jp>

代金引換、銀行振込、郵便振替、クレジットカード決済、コンビニ決済がご利用いただけます。

※クレジットカード決済、コンビニ決済についてはインターネットからのご注文に限ります。

※銀行振込および郵便振替の振込手数料はお客様ご負担となります。

※コンビニエンスストアでのお支払いの場合は、一律200円（税別）の手数料がかかります。

■電話・ファックスの場合

電話 03-5775-1145 受付時間11時～19時 ※土日祝祭日、年末年始を除く

FAX 03-3475-5805 注文内容をご記入の上送信してください。（24時間対応）

■数量、配送地域によって送料は変わりますのでお問い合わせください。ホームページからのご注文の場合は、送料が自動計算され事前に確認することができます。